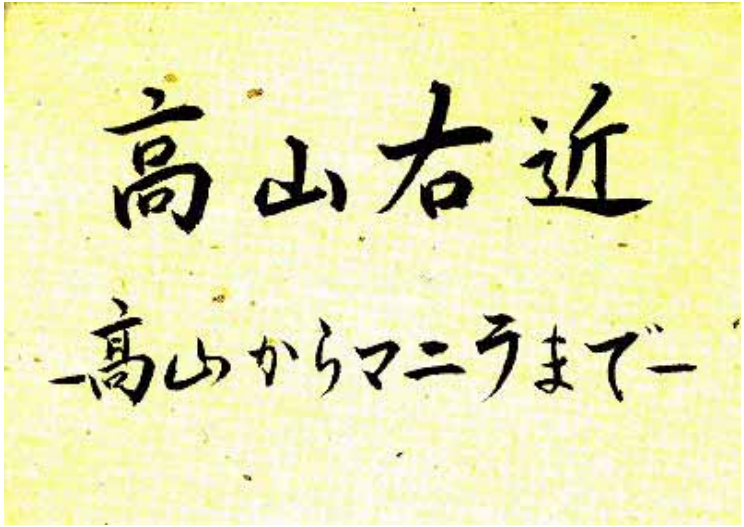
髙山右近の生涯 －高山からマニラまで－



髙山右近の生涯　－高山からマニラまで－

　髙山右近は、今から４５０年前、１５５２年、摂津の国、現在の大阪府豊能郡豊能町高山で生まれ、１６１５年、フィリピンのマニラで、６３歳で天に召されていきました。時代で言いますと、室町時代から、安土桃山時代、そして、江戸時代のはじめの頃まで。いわゆる戦国時代を生きぬいてきた人です。

　戦国武将。キリシタン大名。築城、
そして、茶の湯の名手。

　その誕生から召天（帰天）までの生涯を、ご一緒にたどっていきたいと思います。

①髙山右近生誕之地

　髙山右近は、今から４５０年前（１５５２年）、大阪府の豊能町高山で生まれました。２０歳くらいまでの名前は「彦五郎」といいました。お父さんは髙山飛騨守、お母さんは、クリスチャンになってからの名前しか伝わっていませんが「マリヤ」といいました。
　６人きょうだい。男３人女３人の長男でした。
　高山には５歳の時までいましたから、今でいうと、小学校に入るまでの間を、高山ですごしました。

②髙山右近受洗之地

　小学生・中学生にあたる頃は、奈良県宇陀市にある沢城ですごしました。
　少年彦五郎は、１２歳の時、沢城に招かれてやってきたロレンソという人から神様の話を聞き、クリスチャン、当時の言い方ではキリシタンになって、バプテスマ（洗礼）を受けました。

③右近こどもまつり

　毎年、５月５日に、沢城のあった城山のふもと、「髙山右近受洗之地」の碑のそばで、「右近こどもまつり」がもたれています。この地で、右近のことをよく研究された大門（だいもん）貞夫さんたちが、教会や地域の方々の協力のもとに始められたものですが、今年（２００８年）で、３８回めになります。

④芥川城（高槻市）

　１５６９年から７０年にかけて、高校生にあたる頃（１７～１８歳）は、高槻城主・和田惟政（これまさ）のもと、父・飛騨守が城番となった芥川城（山城・標高１８２m）ですごします。
　その後、織田信長により廃城の命が出され、髙山父子は、高槻城下に移ります。

⑤白井河原合戦跡（茨木市）

　１５７１年、「白井河原の合戦」が起こり、和田方は、今の茨木市の耳原（みのはら）公園のあたりにあった「糠塚」に陣を構え、池田方・主力の荒木村重や中川清秀と戦います。
　この時、和田惟政は僅か２００の手兵を率いて出陣、相手方に対する判断を誤って、突撃し、鉄砲隊の襲撃を受けて、戦死してしまいます。
　その子・惟長（１７歳）が高槻城主になります。

⑥高槻城・初日を受ける髙山右近像

　若くして高槻城主となりますが、器ではなかった和田惟長による後見人の叔父・和田主膳の殺害、つづいて「髙山父子暗殺未遂事件」が起こります。彦五郎も惟長も大けがをし、それがもとで、惟長はなくなります。

　髙山飛騨守が高槻城主になりますが、しばらくして、傷もいえた彦五郎に家督をゆずりますので、高槻城主・髙山右近が誕生します。

⑦高山右近天主教会堂趾

　１５８１年（天正９年）には、領民２万５千人のうち１万８千人、７２％がキリシタンであった、と宣教師たちが報告書に書いています。
　この時期、領内には２０以上の教会がありましたが、その中心は、高槻城の中にあった教会です。教会堂は、現在の野見神社があるあたりにありました。
　尚、碑はいろんな事情の中で建てられていますので、建てられている場所がその場所というわけではありません。

⑧キリシタン墓地

　教会隣接の「キリシタン墓地」で、１９９８年、２７基の木棺と２組のロザリオが発掘されて、大きな話題になりました。
　木棺のふたに、墨ではっきりと描かれていた十字架。縦１０㎝、横８㎝の二支十字。木棺の中に納められていたのは、身長１５０～１６０㎝の熟年男性でした。

⑨祈る髙山右近像（カトリック高槻教会）

　ところで、髙山右近は、どんな顔立ちの人だったのでしょうか。
　肖像画が残されてはいませんので、わかりませんが、前田利家や宣教師フロイスの言葉から、皆さんでイメージしてみてください。

「髙山右近は誠に思慮深く、かつ傑出した人物である。その人となりは勇敢無双、教養あり、また廉直である。」
（前田利家）

「明晰(せき)な知性を持ち、稀に見る天賦(ぷ)の才能ある青年で、ミヤコ地方全キリシタンの柱石である。」
（宣教師フロイス）

⑩都の南蛮寺跡

　織田信長の頃の教会堂で、本能寺（現在の場所のものではない。）のすぐ近くにありました。
　１５７６年８月１５日に献堂式が行われました。髙山父子も、その建設に尽力しました。
　一般には「南蛮寺」と呼ばれていましたが、正式には「被昇天の聖母の会堂」です。
　狩野元秀（永徳の弟）の筆になる「扇面洛中洛外図」の一つに「南蛮堂」として描かれています。
　妙心寺・春光院に、この教会で使われていたと思われる「イエズス会の紋章の入った鐘」が残されています。

⑪明石・船上城

　１５８５年（天正１３年）、髙山右近は惜しみ、惜しまれながら、毎日人々が救われ、そして洗礼を受けていった高槻４万石の地を離れ、播州・明石６万石に転封・配置がえがあり、明石船上（ふなげ）城に移ります。
　２年後の１５８７年、秀吉によって「吉利支丹伴天連追放令」が発せられ、右近は「たとい人、全世界をもうくとも、おのがアニマ・魂を失わば、何の益かあらん。」とのデウス（神）のみことばに従って歩む決意をし、封禄・領地のすべてを返上、このことによって、栄誉も地位も、財産も、職も、収入も、いっさいが無くなってしまいます。

⑫金沢城・西内惣構堀

「伴天連追放令」から１年余り、高山右近とその家族は、小西行長の庇護のもとにあって、小豆島、そして熊本県の宇土へと流浪の旅を続けていましたが、加賀百万石の前田利家から、金沢へ来るように招きを受けます。

右近は、利家からの誘いに対して、「禄は軽くとも苦しからず。耶蘇寺の一か寺、建立下さらば参るべし。」と答えて、１５８８年（天正１６年）の秋、金沢にやってきたのでした。

金沢城の修築や、金沢城の守りを堅固にするために城下にぐるりと堀をめぐらせた、東西の内惣構堀（うちそうがまえぼり）など、築城の名手であった右近の才能は、いかんなく発揮されていきました。

⑬高山右近像（高岡城）

　築城の名手であった右近ですが、高槻城や明石・船上城は、もともとあった城に手を加えていったものでした。
　前田利家のあとを継いだ利長のために縄張り（設計）をした高岡城は、一からの築城でした。高槻城や船上城は今訪れても、その面影も残されていませんが、高岡城は、江戸時代の「一国一城令」のため廃城とされた後も、濠や跡地はそのまま残されていますので、右近の築城の姿に触れることができる貴重な場所になっています。

⑭右近点前の像（聖イエス会　金沢教会）

　右近は「利休七哲」の一人。「利休極上一の弟子也」加賀の国でも、お茶の世界に大きな影響を与えました。
　武将としての経験は、特に２代目・前田利長の補佐役として大事な働きをしました。
　又、当時の、加賀の国のはやり唄に、
　♪　能を見ようなら髙山南坊（みなみのぼう）、面（おもて）かけずの十次郎を
　（能を見ようと思ったら、髙山南坊とその長男の十次郎親子の能にまさるものはない。）と、歌われたほどでした。能の世界でも、実力派でした。
　能面をつけなくても見事な十次郎。長男の十次郎は、評判の美男子だったようです。そのお父さんの右近も、おそらく・・・・。

⑮金沢・殉愛キリスト教会の「右近荘」

　右近は、加賀の地に２６年間いたのですが、金沢で、髙山右近のことを一番よく研究されていますのは、殉愛キリスト教会の牧師・山縣　実先生です。「髙山右近に息吹かれ」「霊峰めざして－髙山右近思考－」などの著書があります。
　教会には、茶室「右近庵」がありますし、資料室「右近荘」があり、右近やキリシタンに関する貴重なものが展示されています。
　写真の和服の方が山縣牧師、右の二人は右近の長男・十次郎の子孫にあたる髙山豊次・美智子夫妻です。（羽咋郡志賀町在住）

⑯「右近灯籠」　（金沢・立像寺）

右近関係のものというか、キリシタン関係のものは、秀吉や家康他、権力者たちによって、徹底的にこわされ、姿・形が残らないようにほうむり去られましたが、これは、２６年間いた金沢を追われて、離れていく前に、親しかった富田半左衛門に託したものでした。

徳川幕府の「大禁教令」のもと、託された方も大変ですが、日蓮宗・立像寺（りゅうぞうじ）の和尚さんの協力もあって、ひそかに守られてきました。

最近になって（１９９３年）、富田家の子孫の方が明らかにされて、右近関係の灯籠であることが、はっきりしたのでした。

⑰サン・オーガスチン教会（マニラ）

　１６１４年１１月８日、長崎を出帆。小型の老朽船に１００名以上がつめこまれて、多すぎる乗員。暴風・逆風に悩まされ、普通の船で、順風ならば１０日ほどで行けるところを、実に３４日もかかって、フィリピンのマニラに到着します。

　右近たちが、信仰ゆえに、祖国を追放されてくるという話は、すでに伝えられていましたので、総督のファン・デ・シルバをはじめ、市民たちは、一行を敬意をもって、大歓迎しました。

　右近たち一行は、上陸後、総督官邸に入り、丁重な歓迎を受けます。その後、護衛兵付きの総督の馬車で宿舎に向かう途中、マニラ大聖堂と、サン・オーガスチン教会で馬車を降り、祈りをささげました。

⑱マニラの髙山右近像

　旧　日本人居留地であるパコ駅前のディラオ広場「比日友好公園」に、高槻の城跡公園にある「髙山右近像」と同じものが建てられています。
　マニラの日本人町「ディラオ」と髙山右近とは、直接の関係はありません。
　最初の日本人町「ディラオ」は、イントラムロスのすぐそばにありましたが、１６０６～７年（右近が来る７年前）、ディラオの日本人がむほんを起こしたため、焼き払われてしまいました。その後、再建されていきますが、徳川幕府の鎖国令のため、ディラオの日本人の数は減少していき、１７６２年にディラオはパコに移され、それも、５年後には消滅してしまいます。
（第二の日本人町「サン・ミゲール」が１６１５ ～１７６８年の間、ありました。）

⑲まだ見ぬ故郷

　真冬の金沢を捕われの姿で出発し、雪でおおわれたけわしい山々を越え、常に不自由で欠乏の長崎までの旅。つづく狭い船での、長くて苦しい航海。
　肉体的には、右近は限界に来ていたようです。マニラに到着後、４０日ほどで、ひどい熱病にかかります。
　モレホン神父や、若い５人の孫たち、遺された者たちに対する、別れの言葉・遺言は感動的です。
　数日後、病状は悪化し、「わが魂（アニマ）は、天地万物の御（ご）作者なる御（おん）主を、ひたすら慕い奉る。」と、繰り返し、主イエス・キリストの御（み）名をとなえながら、１６１５年２月３日の未明、静かに天に召されていきました。６３歳。洗礼を受けてから、５０年の生涯でした。

⑳右近の遺骨

① １６１５年２月３日、マニラで６３歳で召天。盛大な葬儀の後、右近の遺骸は、聖アンナ教会の主祭壇のかたわらに葬られました。
② １６２２年、地震で聖アンナ教会の天井が崩壊。遺骨は、サン・ホセ学院の石棺の中に納骨されました。
③ １８９５年の大地震で建物が崩壊。遺骨は、聖イグナチオ教会の納骨堂へ。
④ 日本軍との戦争で、アメリカ軍の爆撃を受けて教会は破壊。遺骨はちりぢりばらばらの状態に。
⑤ 戦後、集められた８７柱の遺骨が、ケソン市ノバリチェスにあるイエズス会の修道院（聖心修練院）の２つの納骨堂（クリプト）に。その中に二つの銀の骨壷があり、その一つが髙山右近のものかもしれない、と有力視されています。